
淡桜

ryoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淡桜

【Nコード】

N03720

【作者名】

ryoku

【あらすじ】

恋ともいえないほどの、淡い出会いをテーマにしています。
短編読みきりです。

いつもの学校の通学路にある古い美術館。
そこにある大きな桜の木。
そして傍らには自分と同じくらいの少女の姿があった。

あの子、今日もいる・・・。

毎日同じの学校への通学路に古い美術館があった。

そこには大きな桜の木があつて、何故かいつもその下に自分と同じ位少女が立っていた。

「純！昨日塾サボつたつて連絡があつたわよ？どう言うこと？」

「最近の模試も点数が下がってるじゃないか！つまらない事に関心を向けるくらいなら勉強しろ！！」

毎日毎日受験のはなし・・・両親と教師達の威圧を感じていた。別に学生が勉強の事を言われるのは仕方ないとしても一方的な文句にイライラする。

「なあ今日塾休みだろ？遊びに行かないか？」

「俺はいい」

「何だよ、付き合い悪いなあ・・・」

クラスメート達のちよつとしたことにもイライラする・・・なんでこんなに・・・

「クロつちよつと待つて！！キヤア！！」

「うわ！？・・・痛ッ・・・」

打った頭をさすりながら、上に被さっている人物に目をやる。

「・・・大丈夫か？」

「あつ・・・ごめんなさい！」

急いで体の上からのいたのは、いつも美術館にいる少女だったと気づく。

「ちよつと猫を探してたから・・・私、紗雪さゆきって言うの、あなたは？」

「・・・俺は純、藤本純」
ふじもとじゅん

紗雪は腰まである黒い髪に淡い色の着物姿。今の時代どこのお嬢さんだよ？つとは思っても口には出さない。

「そうだ！純君私と友達になって？こうして会ったのも何かの縁だし、ね？」

「・・・いいけど・・・」

唐突な話だったが、あまりに優しく微笑まれたため思わず返事をしてしまった。けどそのことは俺にとっても良い暇つぶしの場所ができた。それから俺は学校や塾をさぼっては、美術館に・・・紗雪に会いに行くようになった。

「紗雪、学校とかないのか？」

前から気になっていた事を聞く。

「学校に行つてないから」

「いいなあ、俺なんて行きたくねえのに・・・」

「純君は学校嫌いなのか？」

そう聞かれてもはつきり嫌いとは言えない。好き嫌いとかそんなことじゃなくてただ無意味なものみたいなものだから・・・。それ以上追及されても面倒だし・・・。

「・・・ゴメン・・・俺ちよつと用事あるから帰るな」

「あ！」

「ん？」

「あのね・・・私、もうすぐここを離れるんだ」

「引越すのか？どこに？」

「どこへかはわからないけど・・・今月の１０日に」

それから家に帰って、いつも通りの両親が説教を言っていたが俺の耳には届いてなかった。紗雪はあと少しでどこかに行ってしまう・・・。あと少しで・・・紗雪はいなくなる・・・。

『・・・離れる前にここの桜・・・最後に見たかったけど・・・』

「藤本君こんな成績で志望校に行けると思ってるの？藤本君？」

「・・・先生・・・桜っていつ頃咲くの？」

いきなりの質問に担任は不思議な顔をしたが、少し考えてから答えてくれる。

「桜・・・そうね・・・3月末位じゃないかしら？」

それを聞くと純は立ち上がり教室を出て行った。

「つちよつと藤本君！！」

俺の頭の中は紗雪にどうしたら桜を見せれるかでいっぱいだった。

「3月末なんて絶対間に合わない・・・どうしたら・・・」

「あれ？純君今日は早いんだね？」

「ああ・・・今日は昼まで授業なんだ」

「どうしたの？具合悪い??」

いつもと違う様子だと思っただのか、気がついたのか紗雪が心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ああ・・・また、親に怒られてむかついてるだけ！」

「そう？」

「・・・紗雪・・・」

「何？」

「桜、咲かないな」

「それはそうよ、でも蕾は増えてきたね」

「やっぱりまだ桜咲かないよね・・・」

怒られながら急に俺が言っただ見当違いな事に、両親は変な顔をしたが俺の頭の中は桜のことばかりだった。

どう考えてもあの桜を咲かすなんて無理だ・・・あの桜は咲かない・・・。

両親には今の成績でいける普通の高校へ行くと言っと、両親は俺になにも言わなくなった。

町中を走り回ったけど・・・造花はあるけど、本物の桜なんてない。
「そうだ・・・」

美術館に着いた頃は午前12時前・・・明日は紗雪がいなくなる日。

「・・・純君？どうしたの？」

「どうしたのってこっちの台詞！」

まさかこんな遅くまでいるなんて・・・そりゃいてくれて良かったけど・・・。

「何？・・・その包み・・・」

純が持つ大きな袋に包んだものを紗雪は不思議そうに見つめる。

「これ？・・・ゴメン！桜見せるって言ったのに・・・結局見せる
ことできなくて・・・」

謝りながら布で包んだものを差し出す。

「？・・・純君これ！」

受け取った紗雪がその布を取ると、そこには一枚の絵があり、その絵には満開の桜が描かれていた。

「下手だけど・・・ここの桜を描いた絵なんだ・・・」

それは小さい頃、両親とも仲が良くて一緒に父親とここの桜を描いたものだった。紗雪はじつとその絵を見つめて顔を上げると・・・

「うっん、すごく綺麗・・・純君・・・ありがとう」

紗雪の足元でクロも嬉しそうに「やー」と鳴くと、首輪がチリンと揺れた。

「クロ！・・・そうだ純君、お礼に美術館を案内するわ」

「え？」

紗雪に招かれ入った美術館の中は大きな窓が月明かりに照らされ、静寂の空気と幻想的な空間を作っていた。

楽しそうに絵の紹介をする紗雪は本当に嬉しそうだった。

「紗雪、あの絵は？」

一番すみに飾られた絵には何も描かれていない真っ白な絵だった。

「あれはいいの・・・さつ純君こつち」

つと紗雪は言ったが気になりしばらく見てみると、その絵は古いものらしく端などが傷んでいるようだった。

「純君ほんとに桜見せてくれてありがとう！私とっても嬉しかった」
何か色々言いたいこととかあったけど紗雪の嬉しそうな頬笑みを見るとそれだけですごく満たされた気がした。

紗雪と別れ帰ってきたそのまま珍しくぐっすりと眠ることができた。
こんなにすつきりとした気持ちは久しぶりだった。

「あら、おはよう・・・そうそう美術館今日壊されるらしいわよ・・・
ほらあの昔行った・・・」

「母さん！それほんと！？」

あの美術館がなくなるなんて知らなかった・・・無我夢中で走り美術館に着くと大きなトラックが美術館の荷物を運び出しているところだった。

そつとトラックに近づくと何枚もの絵が並び、昨夜紗雪に紹介してもらった絵達だ・・・。

ガタつと音がした方を覗くとトラックの荷台から一枚の絵が落ちたので、拾うとそこに描かれていたのは・・・。

「こら！勝手にみちやいけないだろ！！」

「コレで荷物全部です！出発しまーす」

手に持っていた絵を返すと、トラックは走り去ってしまった。

「・・・さつきの絵・・・」

絵に描かれていたのは、黒髪で着物をきた少女が手に桜を持ち微笑む表情と、よりそうように傍らに座っている黒猫の姿だった。

『・・・チリン』

鈴の音の方へ行くとまだ咲くには早いはずなのに、桜の枝には淡い色の桜の花が咲き乱れていた・・・その一つの枝には、クロがしてい

た首輪の鈴が風に揺られて鳴っている。

後から知ったことだけど、その美術館は昔有名な絵描きが建てたもので早くに亡くした娘が好きだった桜の木を植えたそうだ……。町の人達が歴史的建造物だと言ったが、美術館は結果的には老朽化というのもあり壊すことになったが、桜の木だけはその場に残されることになったそうだ。

これが恋と言えるのかはわからないけど……。確かに俺の中に温かいものが広がってる気がした。

「また会えたらいいな……。」

もうすぐこの街に春が来る……。

>>>Fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0372o/>

淡桜

2010年10月11日14時30分発行